

そのコイの価値は

いくらですか？

レストランで待ち合わせていた、午後八時。青年は首を傾げた。そろそろ来てもいい頃だが...

。

彼の中の色々な疑念は、やわらかい手が肩に触れる感触を覚えた瞬間に消えていった。

「お待たせ！」

彼女は陽気であった。店内のシャンデリアに劣らぬ輝きを放っていた。さすがの彼でもこれには心を揺り動かされた。

「ああ、いや、だいじょうぶだよ。」

「何それ？らしくないよ？」

彼女はまたも満面の笑みを浮かべた。純粹な目の色だった。

青年と彼女との出会いは、道端――といっても、常人のイメージとはだいぶ掛け離れてしまうだろう。粗末な居酒屋の建ち並ぶ裏路地の中だった。会社の上司に付き合わされての帰り道だった。すっかり酔い潰れた彼女は、曲がり角で青年とぶつかってしまったのだ。背景さえ違っていれば、時折恋愛話に出てくるベタなシチュエーションなのだ。しかし景色だの何だのは関係なしに、それは彼等にとっては運命的な出会いだった。そこから二人の仲は良い方向へ発展してゆき、この日で交際一年目を迎えた。それを祝おうと、二人は都心にある小洒落たレストランで一緒に食事をする約束をしたのだった。

料理を注文し終わってから、向かい合って座っている二人は談笑した。青年は彼女の声に心を奪われていた。真珠の玉を転がしているような優しい声。汚れのカケラも感じさせない、きわめて無垢な笑い声...

「ねえ、聞いている？」

このような失態を青年はしたことがなかった。すっかり惚れてしまっていた。

「う、ああ、ごめん」

「やっぱりなんか変だよ、今日。どうかしたの？」

やはり、彼女の目には誠実さがあった。本気で心配してくれていた。熱くなる胸を抑えて、青年は言った。

「ああ、何でもないよ。」

彼女の無垢な心に彼の異変は確かに響いていたが、あくまで優しくかった。落ち込んでいる様子であれば、すぐにでも元気にしたかった。彼女は更に話を盛り上げ始めた。それは青年の心をもっときつく締め上げた。こんな話を切り出すなんて彼にとっては断腸の思い、いやそれ以上の苦しさだった。この苦しみが続くくらいならいっそ、このまま時が止まってしまえば良いのに！

食事も終わりに近づき、雰囲気的にはここで青年がプロポーズをしてもおかしくない状態となった。青年は口の周りを拭き、改まった姿勢をとった。

「あのさ、話があるんだ。」

その緊張感を察してか、彼女も思わず口の周りを舐めた。その目には期待も込められていた気がした。例えるならば、シャンデリアの電球以上の輝きだった。

「えっ、何？」

「実はさ…」

青年は腹の底から声を出した。だがその声はあまりにもか細く、震えていた。俯く彼から落ちた一滴の涙とともに彼女が認識したのは、一言

「別れよう」

あまりの出来事に彼女は思わず笑ってしまった。

「えっ？」

「…。」

「嘘、だよな？」

青年はもう堪えられなかった。大の大人がこんなに哀れな姿を晒すなんて、ありえなかった。

「ごめん」

彼は走り出した。もう振り返れなかった。

青年はすぐ電話を掛けた。ある男にだった。

「…もしもし」

「あ、もしもし。」

青年は涙声を極限まで抑えて喋っていた。

「今出たところです。もうそちらは大丈夫でしょうか？」

「ええ、そのレストランの近くの曲がり角ですよな？」

「はい、大丈夫そうですね、よかったです。」

「…あの、声、どうかされました？」

「ご報告したようにですね、」

「？」

「あの方は、とても愛情があります。」

「突然何を？」

「私は、あの方を好きになってしまったのです。」

「…。」

そう、青年が仕事の最中でその人を好きになってしまうなど、ありえないのだ。それほどに彼女は…。

「あなたの過去についても、知っています。あなたをそうしてしまうほどに…。」

「ええ、ですから…あの人を傷つけたら許しません」

「はい」

「…安心しました。あ、出てきました…泣いています。抱いてあげてく…」

「無茶言わないで下さい！まだ私的な付き合いなど、ないんですよ？」

「...すみません。ではっ...頑張ってくださいね...」

「はい、それでは。」

抑えられる訳がない、彼のような状況に置かれて誰が！泣かずにいられようか。彼女の性格から何までについて調べ上げ、恋愛までしたのに！

「...それすらも、仕方ないような世の...世になって」

青年は泣いた。

---

時代は嘆かわしいものとなった。現代の風潮では『彼氏持ち』という格付けが欲しいためだけに恋愛をする者が多いそうだ。伴侶を幸せにしたいかという質問に男性の殆どがイエスと答えたのに、女性はその半分もいないそうだ。そんな『恋愛』というモノを、疑わずにいられるか？やはりあなたがたも、青年に頼んでみるべきなのかもしれない。

『好きな人がいるんですが、疑いのない恋愛をしてもいい人なんですか？』

彼の仕事は確実ですよ。できちゃった婚の産物、両親に捨てられ孤児院で育った彼は、愛というものに敏感なのです。

さあどうでしょう？今ならお安くしますよ？有料だとしても、確実な愛を育むのが得策なのではありませんか？もっともあなたが、青年を辛い目に合わせなくて済むなら、例え疑いがあるかもしれない恋愛をすることになっても構わないというお人よしであったら、話は別ですがね。

## そのコイの価値はいくらですか？

<http://p.booklog.jp/book/73023>

著者：重長真

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/greenhilldream/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73023>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73023>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ